

(7)

オピニオン

(第3種郵便物認可)

四月半ば、長崎よりやや遅く、東京でもサクラが満開を過ぎたころ、地下鉄日比谷線広尾駅から出て有栖川公園の方に緩やかに上る道の途中にある在日ドイツ大使館で、「ドイツ社会保障史展」の開会式典があった。

式典は近代的建築で美しい大使館の中央に位置する吹き抜けのアトリウムで行われた。駐日大使に引き続き講演したドイツ連邦労働社会省のヨアヒム・ツヴァイク氏は、社会保障の歴史を振り返って、ドイツにおける社会福祉は社会と個人、双方の「自由」を達成するための手段であったし、また現在もそうであると述べた。

写真と、その解説を中心とする展示は、今日のドイツが社会福祉国家として成立してきた道のりを示していた。ツヴァイク氏は同時に、第二次世界大戦を含むナチス時代の負の政策の展示に対し、「過去を知る者だけが、未来を考えることができる。それがドイツの歴史



やまもと たろう
山本 太郎

我々はどこから来たのか

史に対する考えであり、それが、この展示を行った理由の一つである」と述べた。

この言葉を聞いた時、脈絡もなく、「我々(われわれ)はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」という題を持つ絵のことを思い出した。貧困と絶望の中でポール・ゴーギャンが描いたといわれている絵。ゴーギャン自身が「これまでに描いた全(すべ)てのものより優れている

ばかりか、今後、これより優れているものも、これと同様のものも決して描くことはできない」と言った作品である。

横長のやや暗い藍(あい)を基

調とした絵は、人間のさまざまな生の局面を描いており、見るものにさまざまな思いを抱かせる。この絵のメッセージは何かというところについて、ゴーギャン自身明確な説明を残さなかったという。それだけが考えればよい、と思ったのかもしれない。

当時のゴーギャンの絶望とそこから紡がれた思想の深さは知る由もない。それを追体験できるほどの経験もない。が、ドイツ社会保障史展で聞いた一つの言葉とその連想からの一枚の絵。「過去を知る者だけが、未来を考えることができる」という言葉は、ゴーギャンの意識の中にあつた言葉かもしれないと思つた。それは、絶望、希望のどちらであつたとしても、だ。

(長崎大熱帯医学研究所教授)